

2音節名詞第4/5類に対応する 琉球祖語B類は改新であるとする仮説

五十嵐陽介
(国立国語研究所)

日本語学会第164回全国大会ワークショップ
「日琉祖語再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から」
2022年6月19日(日)

日本語(院政期京都)
(1類, 2類, 3類, 4類, 5類)

琉球祖語
(A類, B類, C類)

1類	HH	「花」 「水」	A類
2類	HL	「音」 「雪」	
3類	LL	「山」 「年」	B類 (4語のみC類)
4類	LH	「中」 「息」	C類
		「肩」 「麦」	B類
5類	LF	「鍋」 「猿」	C類
		「雨」 「汗」	B類

通説

- 分裂を生じさせる音韻条件が見つからない
- 4/5類におけるB類とC類の区別は日琉祖語に遡る

(服部1978-79; Shimabukuro 2007; Vovin 2008)

本発表

- 4/5類におけるB類とC類の区別は2つの要因に条件づけられた分裂の結果である
- 分裂を生じさせる要因:
 - ① 語末の狭母音 (金田一1960; 平山他1966; 徳川1990)
 - ② 日琉祖語における多形態素性の保持 **NEW!**
- 4/5類におけるB類とC類の区別は日琉祖語に遡らない

■ 目的

■ 第4/5類における分裂対応は、

- 1) 琉球祖語 (pR) における語末狭母音
- 2) pRの段階まで保持された日琉祖語 (pJ) における多形態素性

に条件付けられた分裂の結果であるとする新しい仮説を提案する

3類

4/5類

pR *jama 「山」

pR *kata 「肩」

pR *mado 「暇」

pR *woke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

B類

C類

3類

4/5類

pR *jama 「山」

pR *kata 「肩」

pR *mado 「暇」

pR *woke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

非狭母音終わり

狭母音終わり

B類

C類

3類

4/5類

pR *jama 「山」

pR *kata 「肩」

pR *mado 「暇」

pR *woke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

非狭母音終わり



狭母音終わり

B類

C類

3類

4/5類

pR *jama 「山」

pR *kata 「肩」 pR *mado 「暇」

pR *wo-ke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

単形態素語

多形態素語

非狭母音終わり

狭母音終わり

B類

C類

3類

4/5類

多形態素語
pJ *wo-kai「桶」
苧-筍

pR *jama「山」

pR *kata「肩」 pR *mado「暇」
単形態素語

pR *wo-ke「桶」
多形態素語

pR *nusi「主」 pR *matu「松」

非狭母音終わり

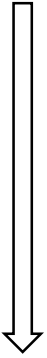
狭母音終わり

B類

C類

3類

pJ *jama 「山」



pR *jama 「山」

4/5類

多形態素語

pJ *wo-kai 「桶」
苧-笥

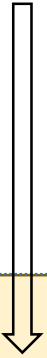
pJ *nusi 「主」

pJ *matu 「松」



pR *kata 「肩」 pR *mado 「暇」
単形態素語

非狭母音終わり

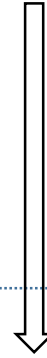


pR *wo-ke 「桶」
多形態素語

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

狭母音終わり

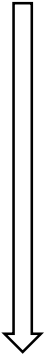


B類

C類

3類

pJ *jama 「山」



pR *jama 「山」

4/5類

多形態素語

pJ *ma-to 「窓」
目-戸

pJ *wo-kai 「桶」
苧-筍

pJ *nusi 「主」

pJ *matu 「松」



pR *kata 「肩」

pR *mado 「暇」

pR *wo-ke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

単形態素語

多形態素語

非狭母音終わり

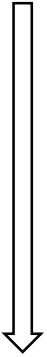
狭母音終わり

B類

C類

3類

pJ *jama 「山」



pR *jama 「山」

4/5類

多形態素語

pJ *ma-to 「窓」
目-戸

pJ *wo-kai 「桶」
苧-筍

pJ *nusi 「主」

pJ *matu 「松」

*mado

単形態素化
(語彙化)

pR *kata 「肩」

pR *mado 「暇」

pR *wo-ke 「桶」

pR *nusi 「主」

pR *matu 「松」

単形態素語

多形態素語

非狭母音終わり

狭母音終わり

B類

C類

非狭母音終わり

狭母音終わり

C

15語

*ato「跡」、*ito「糸」、*jado「宿」、*kesa「先刻」、
*naka「中」、*pera「篋」、*sora「梢」、*kage「陰」、
*koe「声」、*mae「前」、*moko「婿」、*nabe「鍋」、
*woke「桶」、*kuda「管」、*pune「船」

この15語にp]における多形態素性の痕跡を
見つければ良い

21語

*beni「紅」、*iki「息」、*kami「上」、*keu「今日」、
*matu「松」、*nau「何」、*nusi「主」、*obi「帯」、
*omi「海」、*Usu「臼」、*pari「針」、*pasi「箸」、*suzi
「筋」、*tubu「粒」、*tumi「罪」、*tuti「鎚」、*wanu
「我」、*kobu「蜘蛛」、*saru「猿」、*tabi「足袋」、
*tuju「露」

B

29語

*awa「粟」、*ine「稲」、*ita「板」、*kado「角」、
*kama「鎌」、*kasa「笠」、*kata「肩」、*keta「桁」、
*mino「蓑」、*miso「味噌」、*nae「苗」、*pada「肌」、
*poka「他」、*saja「莢」、*soba「傍」、*soto「外」、
*tane「種」、*toga「咎」、*wana「罨」、*wara「藁」、
*ame「雨」、*ase「汗」、*koto「琴」、*mado「暇」、
*majo「繭」、*majo「眉」、*momo「腿」、*puna「鮒」、
*tate「縦」

10語

*kasu「糟」、*kinu「衣」、*mogi「麦」、*nomi「鑿」、
*ori「瓜」、*siru「汁」、*zeni「銭」、*ai「藍」、*kimi
「黍」、*joru「夜」

例外(10語)
別の説明が必要

■ 多形態素性の証拠1: OJにおける甲類・乙類の母音の分布

■ 上代中央語(OJ)の母音の甲類・乙類の区別

- 甲類・乙類の分布に著しい偏り

- 才列甲類(o_1)、エ列甲類(e_1)、エ列乙類(e_2)、イ列乙類(i_2)は語中に現れることが極めて少ない(Frellesvig & Whitman 2008)

■ 多形態素性の証拠1: OJにおける甲類・乙類の母音の分布

■ 語中における例外的な o_1, e_1, e_2, i_2 の分布の説明

1. 多形態素形式が単形態素化した際の母音縮約 (lexical contraction)

■ pJ *kazu-apai 数-合へ > OJ $kazo_1pe_2$ 「数へ」(大野1977)

■ pJ *saki-ari 咲き-有り > OJ $sake_1ri$ 「咲けり」(大野1977)

2. 語中の形態素境界 (Frellesvig & Whitman 2008)

■ pJ *to-nusi 戸-主 > OJ to_1zi 「妻」(上代語辞典編集委員会(編)1967)

■ pJ *me-pi 女-姪/甥 > OJ me_1pi 「姪」(Martin 1987)

3. 借用

■ OJ ke_1sa 「袈裟」(Frellesvig & Whitman 2008; 上代語辞典編集委員会(編)1967)

pJにおける
多形態素性の痕跡

■ 多形態素性の証拠1: OJにおける甲類・乙類の母音の分布

OJ <i>ke₁pu</i> 「今日」	::	pR * <i>kepu</i> 「今日」	Ⓒ
OJ <i>ke₁sa</i> 「今朝」	::	pR * <i>kesa</i> 「先刻」	Ⓒ
OJ <i>mo₁ko₁</i> 「婿」	::	pR * <i>moko</i> 「婿」	Ⓒ
OJ <i>pe₁ra</i> 「籠」	::	pR * <i>pera</i> 「籠」	Ⓒ
OJ <i>so₁ra</i> 「空」	::	pR * <i>sora</i> 「梢」	Ⓒ
OJ <i>ke₁ta</i> 「桁」	::	pR * <i>keta</i> 「桁」	Ⓑ
OJ <i>jo₁ru</i> 「夜」	::	pR * <i>joru</i> 「夜」	Ⓑ

琉球祖語の段階まで
多形態素性保持

琉球祖語の段階以前に
単形態素化

■ 多形態素性の証拠2: 有坂法則の違反

■ 有坂法則: OJにおける音素配列論上の制約

- 「第三則、乙類のオ列音はア列音と同一語根(動詞または語幹)内に共存することが少ない」(有坂1932: 93)

- 語中に o_2 と a とが共起する例外的な語は、もしそれが多形態素形式であれば、有坂法則の違反にはならない

- 有坂法則の違反は、pJにおける多形態素性の証拠と解釈できる

■ 多形態素性の証拠2: 有坂法則の違反

OJ *ato*₂ 「跡」 :: pR **ato* 「跡」 C
OJ *ko*₂*we* 「声」 :: pR **koe* 「声」 C
 (**ko*₂*wa*-)

琉球祖語の段階まで
多形態素性保持

OJ *to*₂*ga* 「咎」 :: pR **toga* 「咎」 B
OJ *poka* 「外」 :: pR **poka* 「外」 B
OJ *soba* 「傍」 :: pR **soba* 「傍」 B

琉球祖語の段階以前に
単形態素化

■多形態素性の証拠3: 語源分析

■先行研究は2音節名詞の一部を多形態素形式と分析する

- 『時代別国語大辞典上代編』(1967)、『岩波古語辞典』(1974)、松本(1974)










■その語源分析の結果はほぼ一致する

- 多形態素形式の透明性を支える証拠がOJの段階まで保持されていたことが、語源分析に関する意見の一致をもたらしたと考えられる

■これらの先行研究が多形態素形式とする第4/5類名詞は9語

■ 多形態素性の証拠3: 語源分析

琉球祖語の段階まで
多形態素性保持

OJ <i>jado</i> ₁ 「宿」	← OJ <i>ja</i> 屋 + OJ <i>to</i> ₁ 戸/処	::	pR * <i>jado</i> 「宿」	
OJ <i>ato</i> ₂ 「跡」	← OJ <i>a(si)</i> 足 + OJ <i>to</i> ₂ 跡	::	pR * <i>ato</i> 「跡」	
OJ <i>ke</i> ₁ <i>pu</i> 「今日」	← * <i>ki</i> 此 + * <i>apu</i> 日 (* <i>ki</i> 来 * <i>aru</i> 有る * <i>pu</i> 節 (Unger 2010))	::	pR * <i>keu</i> 「今日」	
OJ <i>ke</i> ₁ <i>sa</i> 「今朝」	← * <i>ki</i> 此 + OJ * <i>asa</i> 朝 (* <i>ki</i> 来 * <i>aru</i> 有る * <i>asa</i> 朝 (Unger 2010))	::	pR * <i>kesa</i> 「先刻」	
OJ <i>naka</i> 「中」	← OJ <i>na</i> 中 + OJ <i>ka</i> 処	::	pR * <i>naka</i> 「中」	
OJ <i>nabe</i> ₂ 「鍋」	← OJ <i>na</i> 菜 + OJ <i>pe</i> ₂ 瓮	::	pR * <i>nabe</i> 「鍋」	
OJ <i>mape</i> ₁ 「前」	← OJ <i>ma</i> 目 + OJ <i>pe</i> ₁ 辺	::	pR * <i>mae</i> 「前」	
OJ <i>woke</i> ₂ 「桶」	← OJ <i>wo</i> 苧 + OJ <i>ke</i> ₂ 筭	::	pR * <i>woke</i> 「桶」	
OJ <i>mado</i> ₁ 「窓」	← OJ <i>ma</i> 目 + OJ <i>to</i> ₁ 戸	::	pR * <i>mado</i> 「暇」	

琉球祖語の段階以前に
単形態素化

■ 多形態素性の証拠4: 諸方言における分節音の対応の不規則性

- 第4/5類名詞の中には、諸方言間の分節音の対応が不規則なものがある。

- 第1音節の長母音 e.g. *ooke*「桶」
- 第1音節の尾子音 e.g. *kan*ge「陰」、*kiss*a「先刻」
- 消失しない語中無声両唇破裂音 e.g. *kibu*「今日」(<*kepu) :: OJ *ke₁pu*

- 不規則性を見せる第4/5類名詞は9語あり、そのうち6語は、多形態素性を示唆する別の証拠を持つ

- 不規則性はpJにおける多形態素性の痕跡と解釈できる

■ 多形態素性の証拠4: 諸方言における分節音の対応の不規則性

pR *woke 「桶」	Ⓒ	ooke 「桶」(島原, 白峰, 岐阜, 三重)	証拠3	
pR *nabe 「鍋」	Ⓒ	naabe 「鍋」(白峰)	証拠3	
pR *sora 「梢」	Ⓒ	suura 「虚言」(大分)	証拠1	
pR *kage 「陰」	Ⓒ	kaage 「陰」(島原), kanje 「陰」(白峰), kanje 「裏側」(山形), kanji 「陰」(与那国)	—	
pR *kesa 「先刻」	Ⓒ	çissa 「先刻」(与論), k ^h issa 「先刻」(今帰仁), kissa 「先刻」(首里)	証拠1	証拠3
pR *ato 「跡」	Ⓒ	ʔatt'oo 「跡」(今帰仁)	証拠2	証拠3
pR *ito 「糸」	Ⓒ	ittɕu 「糸」(知名), ittɕuu 「糸」(与論)	—	
pR *keu 「今日」	Ⓒ	kibu 「今日」(芦花部)	証拠1	証拠3
pR *mino 「蓑」	Ⓑ	miino 「蓑」(島原)	—	

非狭母音終わり

狭母音終わり

C

15語

多形態素性の証拠あり

*ato「跡」、*ito「糸」、*jado「宿」、*kesa「先刻」、
 *naka「中」、*pera「篋」、*sora「梢」、*kage「陰」、
 *koe「声」、*mae「前」、*moko「婿」、*nabe「鍋」、
 *woke「桶」、*kuda「管」、*pune「船」

例外(2語)

21語

*beni「紅」、*iki「息」、*kami「上」、*keu「今日」、
 *matu「松」、*nau「何」、*nusi「主」、*obi「帯」、
 *omi「海」、*Usu「臼」、*pari「針」、*pasi「箸」、*suzi
 「筋」、*tubu「粒」、*tumi「罪」、*tuti「鎚」、*wanu
 「我」、*kobu「蜘蛛」、*saru「猿」、*tabi「足袋」、
 *tuju「露」

B

29語

*awa「粟」、*ine「稻」、*ita「板」、*kado「角」、
 *kama「鎌」、*kasa「笠」、*kata「肩」、*keta「桁」、
 *mino「蓑」、*miso「味噌」、*nae「苗」、*pada「肌」、
 *poka「他」、*saja「莢」、*soba「傍」、*soto「外」、
 *tane「種」、*toga「咎」、*wana「罨」、*wara「藁」、
 *ame「雨」、*ase「汗」、*koto「琴」、*mado「暇」、
 *majo「繭」、*majo「眉」、*momo「腿」、*puna「鮒」、
 *tate「縦」

10語

*kasu「糟」、*kinu「衣」、*mogi「麦」、*nomi「鑿」、
 *ori「瓜」、*siru「汁」、*zeni「錢」、*ai「藍」、*kimi
 「黍」、*joru「夜」

例外(10語)

■例外

■多形態素性の証拠がなく、かつ語末が非狭母音であるC類(2語)

■ *kuda C「管」

👉文化借用？

■ *pune C「船」

■語末が狭母音であるB類(10語)

■ *zeni B「銭」

👉漢語, 借用語？

■ *mogi B「麦」, *kimi B「黍」

👉他の「穀物」を表すB類名詞との類推？

■ *joru B「夜」

👉*jo B「夜」との類推？

■ *ai B「藍」

👉*ao- B「青い」との類推？

■ *kasu B「糟」, *kinu B「衣」, *nomi B「鑿」, *ori B「瓜」, *siru B「汁」

■ 結論

■ 第4/5類における分裂対応は、

- 1) 琉球祖語における語末狭母音
- 2) 琉球祖語の段階まで保持された日琉祖語における多形態素性

に条件付けられた分裂の結果であるとする新しい仮説を提案した

- ### ■ この仮説は分裂対応を、日琉祖語における対立の反映ではなく、琉球祖語において第4/5類が分裂し、一方が第3類と合流した結果とみなす

■ 結論

- この仮説には例外がある
- それが仮説にとって致命的なものであるか否かは、金田一の類別語彙にない第4/5類対応の名詞にまで考察対象を広げて、仮説を検証することで明らかにできる。
 - e.g. pR *wosa B「箴」、*kase B「総」、*naba C「茸」、*nodo C「喉」等

引用文献

1. 有坂秀世(1932)「古事記に於けるもの假名の用法について」『國語と國文學』9(11): 74–93
2. de Boer, Elisabeth. 2010. *The Historical Development of Japanese Tone*. Wiesbaden: Harrassowitz.
3. Frellesvig, Bjarke and John Whitman (eds.) (2008) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Amsterdam: John Benjamins.
4. Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) Evidence for seven vowels in proto-Japanese. In [3], 15–41.
5. 服部四郎(1958)「奄美群島の諸方言について—沖繩・先島諸方言との比較」『人類科学』11: 79–99.
6. 服部四郎(1978–79)「日本祖語について」『言語』7(1)–8(12). 東京: 大修館書店.
7. 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』東京: 明治書院.
8. 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫(編)(1992–93)『現代日本語方言大辞典(1–6)』東京: 明治書院.
9. Igarashi, Yosuke. (2022). Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Middle Japanese Class 2.4–2.5 nouns. To appear in: *Open Linguistics* 2022, 8.
10. 上代語辞典編集委員会(編)(1967)『時代別国語大辞典: 上代編』東京: 三省堂.

引用文献

11. 菊千代・高橋俊三(2005)『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.
12. 金田一春彦(1960)「アクセントから見た琉球諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7: 59–80.
13. 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京: 塙書房.
14. 国立国語研究所(編)(1963)『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局.
15. 神野志隆光・山口佳紀(1997)『古事記注解4』東京: 笠間書院.
16. Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese Language through Time*. London: Yale University Press.
17. 松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』114: 85–114.
18. 松森晶子(2012)「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1), 30–40.
19. 松本克己(1974)「古代日本語母音組織考—内的再建の試み」『金沢大学法文学論集文学編』22: 83–152.
20. McCarthy, John J. and Alan Prince. 1993. Prosodic Morphology: Constraint interaction and satisfaction. Linguistics Department Faculty Publication Series 14 (Retrieved from https://scholarworks.umass.edu/linguist_faculty_pubs/14, February 22, 2021).

引用文献

21. 仲宗根政善(1983)『沖縄今帰仁方言辞典』東京: 角川書店.
22. 新田哲夫(2009)「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集: 言語・文学篇』1: 15–56.
23. ONCOJ (2020) Oxford NINJAL Corpus of Old Japanese. (Retrieved from <https://oncoj.ninjal.ac.jp/>, February 22, 2021).
24. 大野晋(1977)「音韻の変遷(1)」『岩波講座日本語5』147–219. 東京: 岩波書店.
25. 大野晋・佐竹明広・前田金五郎(編)(1974)『岩波古語辞典』東京: 岩波書店.
26. Pellard, Thomas (2013) Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. In Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*, 81–96. Stanford: CSLI Publishers.
27. 島原第一尋常高等小学校(編)(1975)『島原半島方言の研究』東京: 国書刊行会.
28. Shimabukuro, Moriyo (2007) *A Reconstruction of the Accentual History of the Japanese and Ryukyuan Languages*. Folkstone: Global Oriental.
29. 小学館国語辞典編集部(編)(1989)『日本方言大辞典』東京: 小学館.
30. 徳川宗賢(1990)「日本の方言—日本語の形成とのかかわり」崎山理(編)『日本語の形成』東京: 三省堂.

引用文献

31. Unger, J. Marshall (2010) New etymologies for some Japanese time-words. *Journal of the American Oriental Society* 130 (1): 35–41.
32. 上野善道 (1996) 「名瀬市芦花部有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』(15): 3–68.
33. 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1–30.
34. Vovin, Alexander (2008) Proto-Japanese beyond the accent system. In [3], 141–156.
35. Vovin, Alexander (2010) *Koreo-Japonica: A Critical Study in the Proposed Language Relationship*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
36. Whitman, John, B. (1985) The Phonological Basis for the Comparison of Japanese and Korean. Doctoral dissertation, Harvard University.

Appendix

日琉祖語

(先琉球祖語)

琉球祖語

1類 *pana 「鼻」

>

*pana

1.2類

=

*pana

2類 *kapa 「川」

>

*kawa

=

*kawa

3類 *jama 「山」

>

*jamá

3類

=

*jamá

4/5類 *kata 「肩」

>

*káta

語頭アクセント核の右方移動

>

*katá

*saru 「猿」

>

*sáru

4/5類

=

*sáru

*wo-kaj 「桶」

>

*wó-ke

=

*wóke

*ki aru asa 「今朝」

>

*késsa

=

*késsa

A

B

C

4.5類の音変化の条件

「①後続音節の母音が狭母音でない、②第1音節の直後に形態素境界がない、③第1音節が重音節でない」をすべて満たすとき